

学内広報

2014.3.11

no.1451



特別号

2012年度大学教育の達成度調査

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室の委託を受け、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第5回目にあたり、平成25年3月に平成24年度の卒業生3,089名を対象として実施し、2,524名から回答をいただき、回収率は約82%であった。調査の実施には各学部にも多大なご協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。先にも述べたように、本調査は、本年度で5回を数えた。このため、本報告書では、過去5年間で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は5回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生諸氏の調査へのご協力をお願いしたい。

平成26年1月

大学総合教育研究センター長

吉見俊哉

調査実施方法

- アンケート配布日 : 平成25年3月26日(卒業式)
- 2013年3月卒業生数 : 3,089票
- 有効回答数 : 2,524票
- 回答率 : 81.7%(回答率は、有効回答数/卒業生数で計算した)

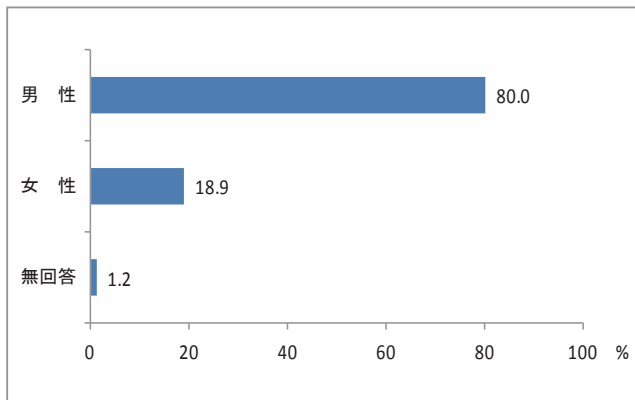
※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。



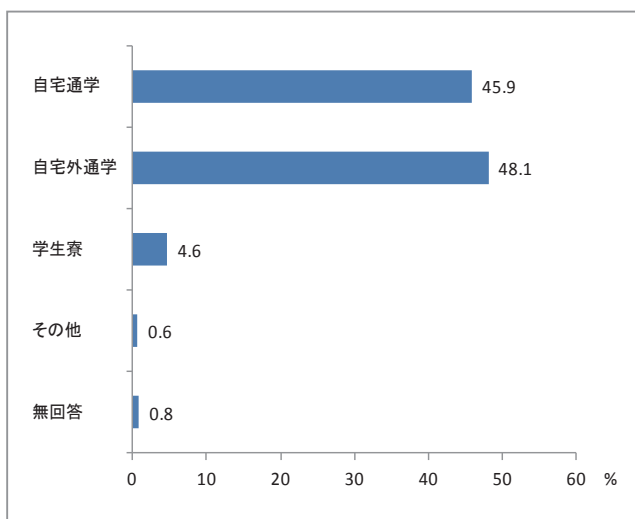
回答者の特性

Q5 性別



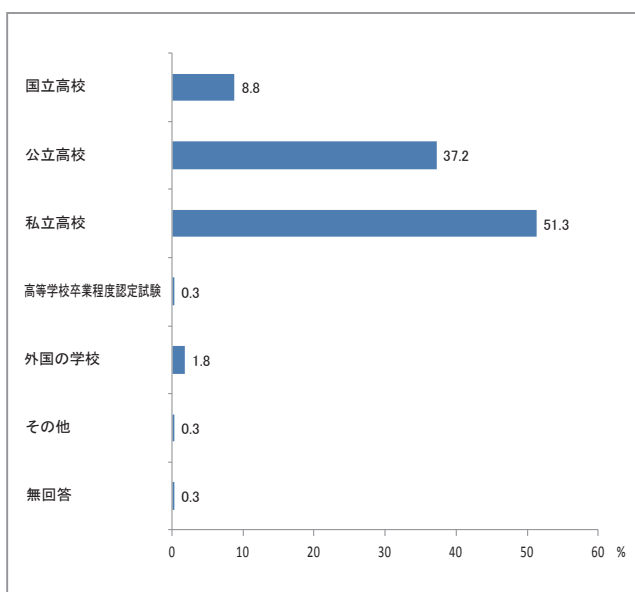
回答者は男性が8割（80.0%）、女性が約2割（18.9%）となっている。

Q6 通学



回答者のうち、自宅通学は45.9%、自宅外通学は48.1%で、学生寮は4.6%と少ない。

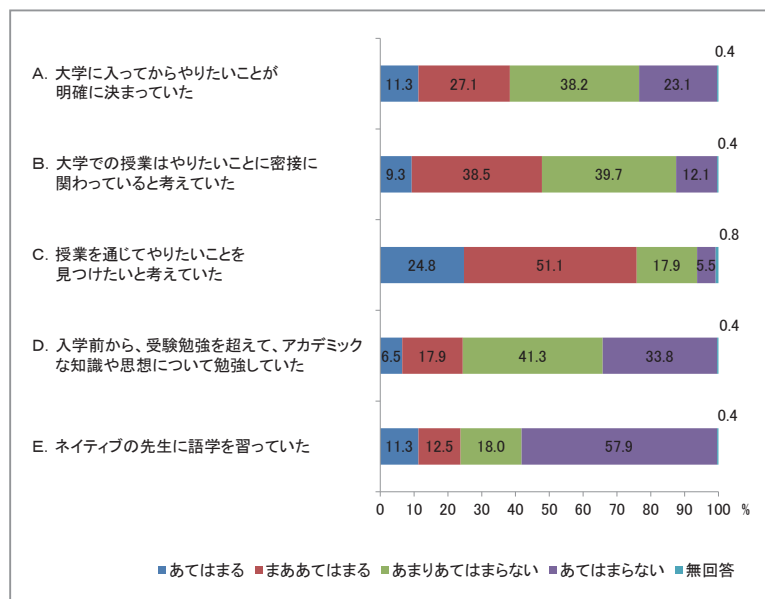
Q7 出身高校等



回答者のうち、過半数（51.3%）は私立高校出身で、次いで公立高校が37.2%、国立高校が8.8%となっている。また、外国の学校は1.8%となっている。

やりたいことが明確：約4割、授業を通じて見つけたい：4分の3

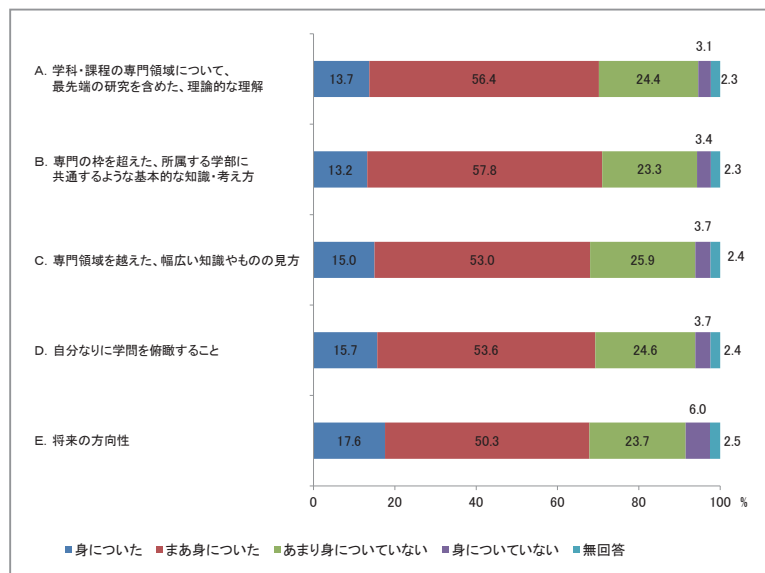
Q8 入学時の様子についてお聞きます。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。



「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて38.4%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」（47.8%）学生はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つけないとと考えていた」が4分の3（75.9%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である late specialization に沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（24.4%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（23.8%）と、入学以前に受験以外の学習をしていた学生は、4分の1未満となっている。

「最先端の理論的理解」、「学部に通ずる基本的な知識・考え方」、「幅広い知識やものの見方」、「学問を俯瞰」を身につけた学生は7割前後

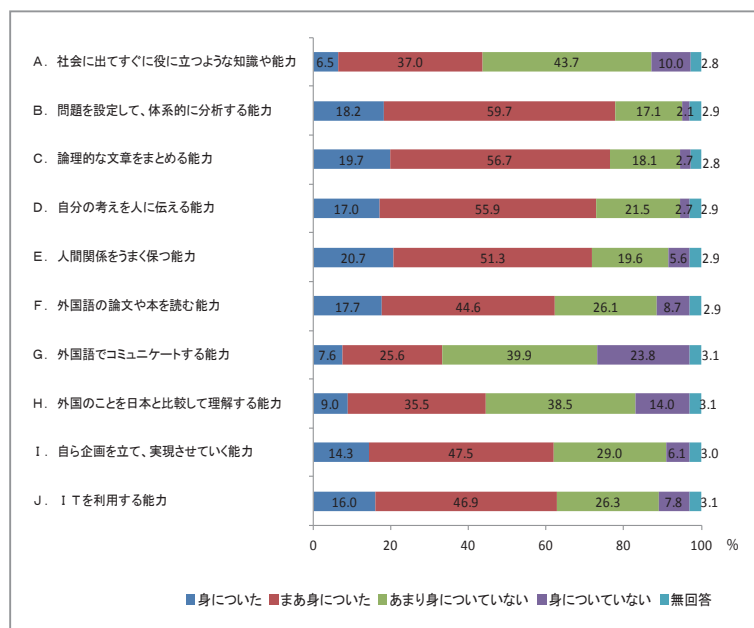
Q9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。



学生が東京大学の教育を通じて身につけたと自己評価しているのは、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的理解」（「身につけた」と「まあ身につけた」を合わせて70.1%、以下同じ）、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」（71.0%）、「C. 専門領域を超えた、幅広い知識やものの見方」（68.0%）、「D. 自分なりに学問を俯瞰すること」（69.3%）で、大学教育の2つの目的、すなわち専門的な深い能力と幅の広い能力が、「身につけた」と「まあ身につけた」を合わせて、いずれも7割前後である。しかし、「身につけた」のみではいずれも2割以下となっている。

外国語の論文や本を読む能力が身についた学生は6割以上 外国語でコミュニケーションする能力が身についた学生は3分の1

Q10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

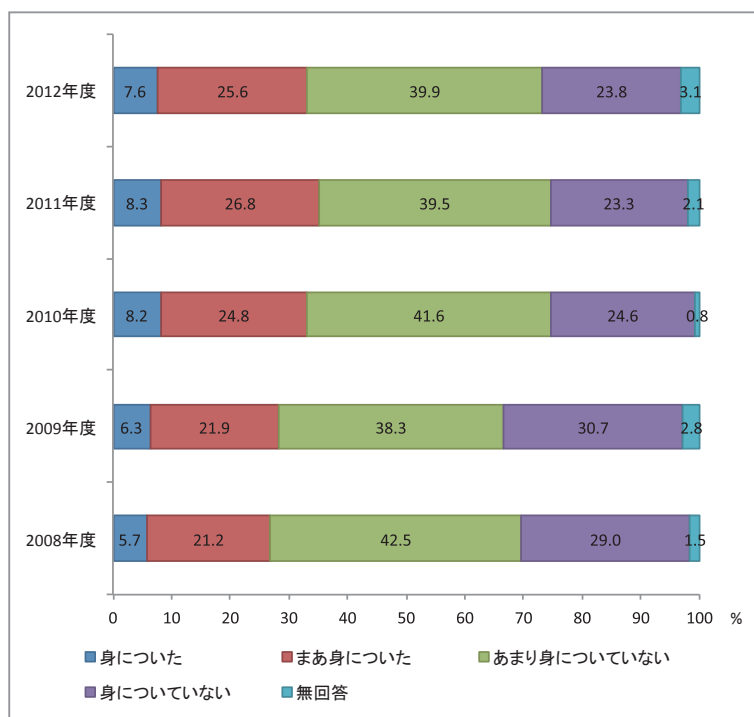


学生が大学時代を通じて身につけたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて77.9%、以下同じ）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」（76.4%）、「D. 自分の考えを人に伝える能力」（72.9%）、「E. 人間関係をうまく保つ能力」（72.0%）といった汎用性の高い一般的な能力であり、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている学生は約4割（43.5%）に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は約6割（62.3%）の学生が身につ

たとしているのに対して、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとしている学生は3分の1（33.2%）に過ぎない。昨年度の調査から新たに「H. 外国のことを日本と比較して理解する能力」を加えた。「身についた」学生は9.0%（昨年度10.4%）、「まあ身についた」学生は35.5%（同37.4%）で合わせて44.5%（同47.8%）の学生が身についたとしている。

外国語でコミュニケーションする能力が身についた学生は少しずつ増加

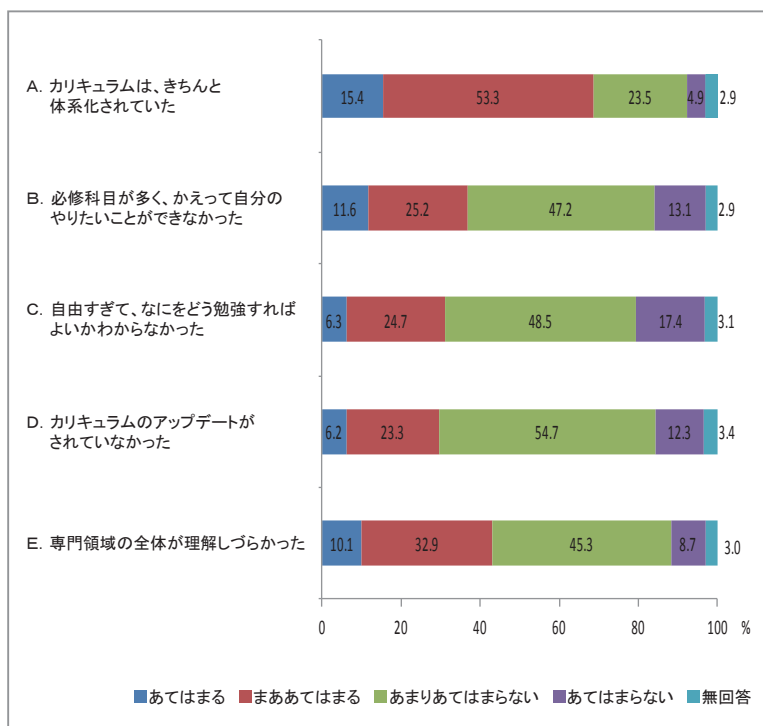
「Q10 G.外国語でコミュニケーションする能力」の推移



※上記の身についた能力については、前年度調査までとほとんど同じ比率で推移している。しかし、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、左図のように、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。しかし、2012年度では、わずかではあるが、2011年度より、身についたと答えた者の割合が低くなっている。

カリキュラムについては肯定的な回答が多いが、約3割の学生は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という学生は約4割

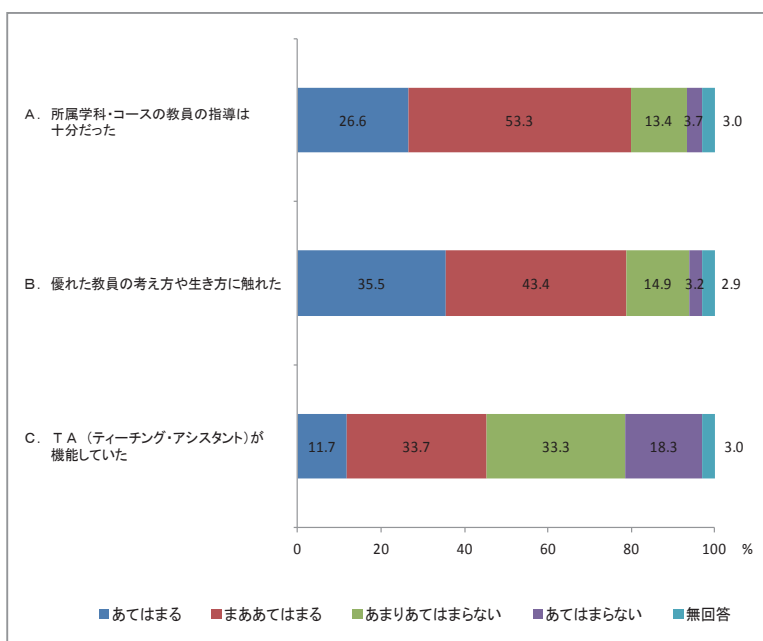
Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする学生が、68.7%（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）と7割近くなっている。「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」（36.8%）「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」（31.0%）、「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」という否定的な評価項目については約3割（29.5%）であり、全体として約7割の学生は肯定的に評価している。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」という学生も約4割（43.0%）となっている。

8割の学生が「指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

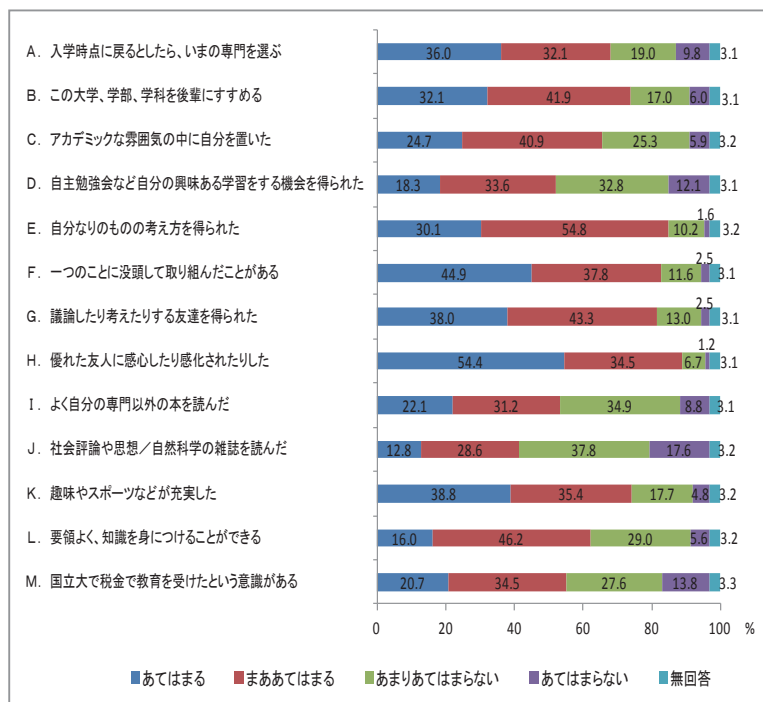
Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」（79.9%）と「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」（78.9%）が約8割となっている。反面、「C. TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」と評価するのは45.4%と半数以下となっている。

「友人から感化」、「自分なりのものの考え方の習得」：9割、「友人と議論」：8割

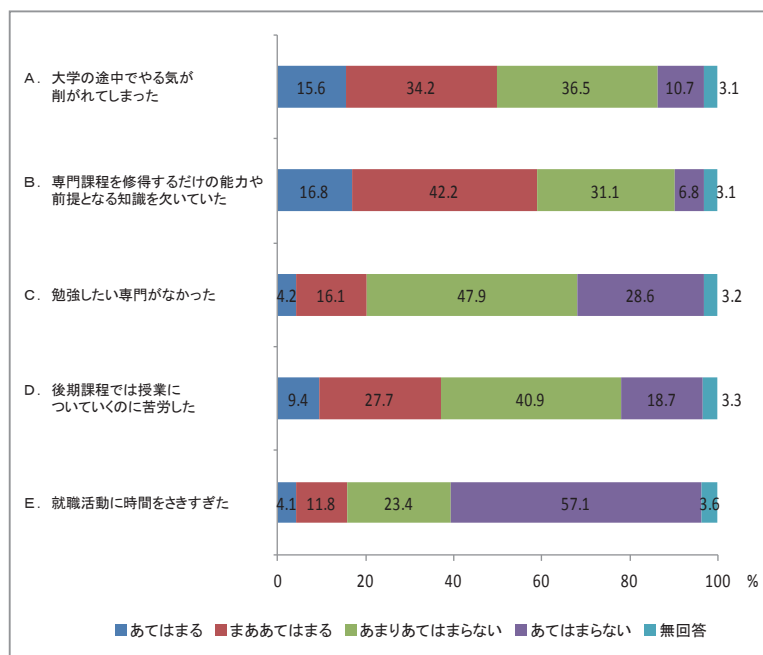
Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」(88.9%)、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」(84.9%)でいずれも約8割以上となっている。また、「F. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」(82.7%)、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」(81.3%)という学生も8割を超えている。ただし、「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」(68.1%)と「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」(74.0%)はやや少なくなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」(53.3%)は半数以上、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」(41.4%)学生の割合は、約4割である。さらに、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」(55.2%)という学生も約半数になっている。

5割弱の学生が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」

Q14 あなたは、大学時代につぎのような経験がありましたか。

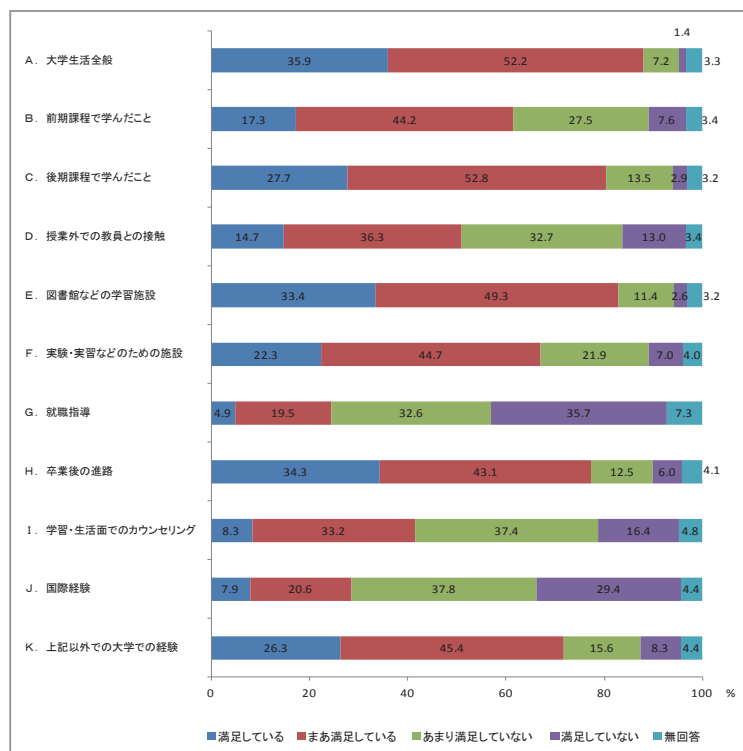


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」(59.0%)で、約6割があてはまるとしている。また、「A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった」(49.8%)学生も約半数になっている。これに対して、「C. 勉強したい専門がなかった」(20.3%)という回答は2割以下になっている。

なお、「E. 就職活動に時間をさきすぎた」(15.9%)については、4月からの予定を「Q26 働く」(後述)とした学生に限ると29.1%となる(グラフ省略)。

満足度：「大学生活全般」9割、「前期課程」より「後期課程」の方が高い 「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」についての満足度は高い

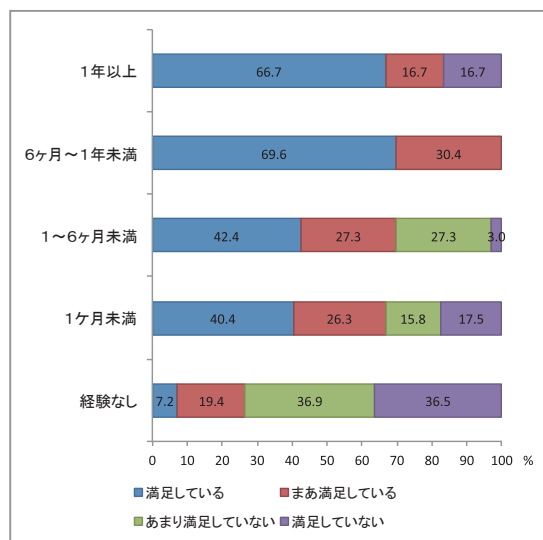
Q15 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。



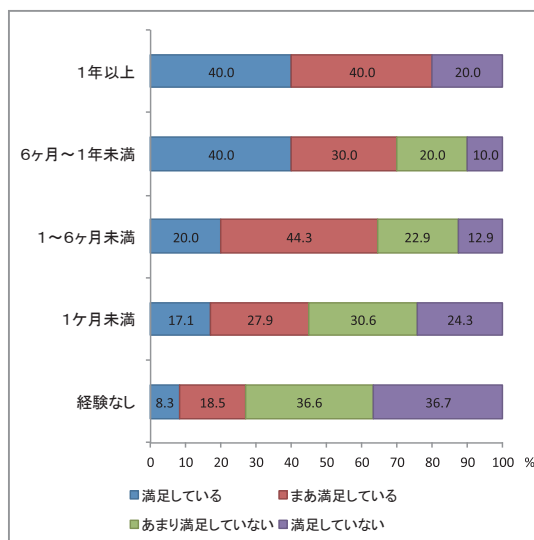
「A. 大学生活全般」に満足している学生は「満足している」と「まあ満足している」を合わせて88.1%と9割に近い。「B. 前期課程で学んだこと」(61.5%)は約6割、「C. 後期課程で学んだこと」(80.5%)は8割、「H. 卒業後の進路」(77.4%)は約4分の3が満足している。満足度が低いのは、「G. 就職指導」(24.4%)で約4分の1の学生しか満足していない。卒業後の進路(Q26、後述)によってほとんど差はみられない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」(41.5%)も4割の学生しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」(51.0%)についても、満足している学生は約半数に過ぎない。「J. 国際経験」の満足度は、合わせても3割(28.5%)に満たない。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

「Q21A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15J. 国際経験」の満足度



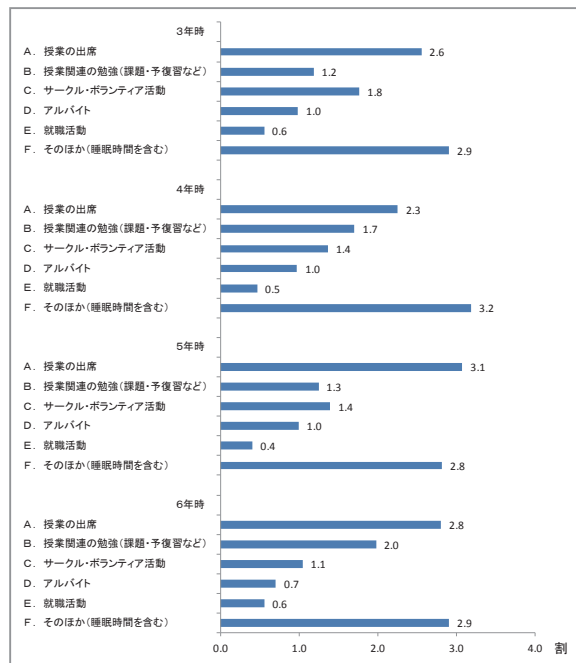
「Q21B. 個人留学した(語学学習)」と「Q15J. 国際経験」の満足度



左の図は、後述の「Q21A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、「1年以上」を除き、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。右の図は、同じように、「Q21B. 個人留学した(語学学習)」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。

時間配分：「授業の出席」に力を入れている、4年生でさらにその傾向は強まる

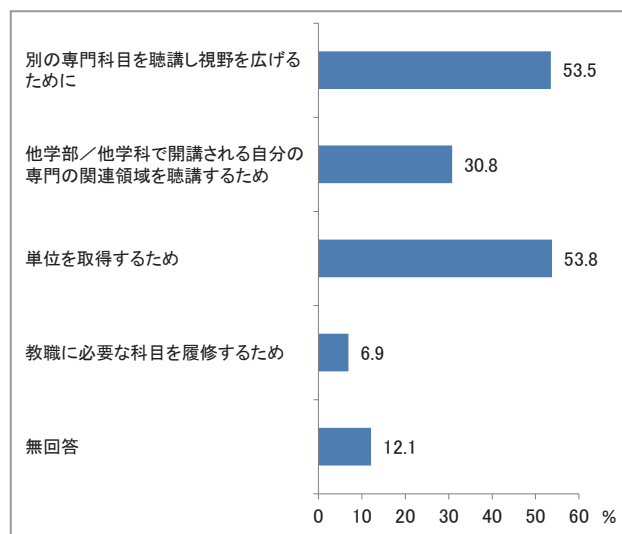
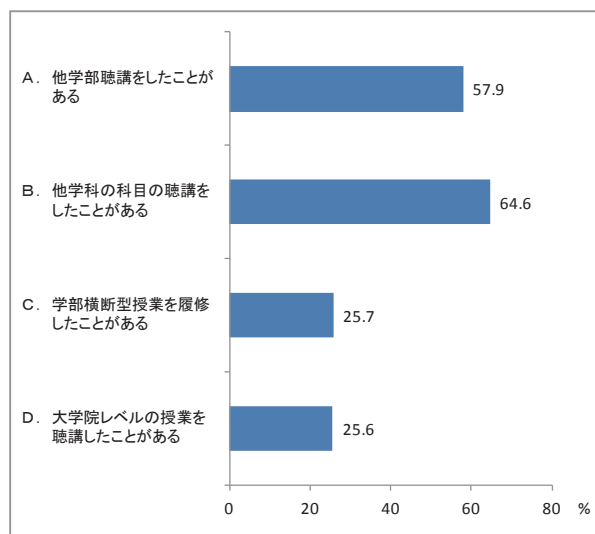
Q16 あなたは、次のような項目に、時間をどのように配分していましたか。試験を除く、学期中の典型的な週を思い出して、（ ）の中に数値を書いてください。



生活時間については、昨年度までと選択肢が異なり、「授業・授業関連の学習」を「A. 授業の出席」と「B. 授業関連の勉強(課題・予復習など)」に分け左図の「A. 授業の出席」から「F. その他(睡眠時間を含む)」まで、6つの項目について、全体を10割としてそれぞれの項目の割合をたずねた。また、「F. その他」は「F. その他(睡眠時間を含む)」として、全体を24時間として割合をたずねることとした。この割合の平均で見ると、学生が最も時間をさいているのは「その他(睡眠時間を含む)」を除けば、「A. 授業の出席」で、3年時で生活時間の約3割弱(2.6割)、4年時には2割強(2.3割)をさいている。また、今年度新たに加えた「B. 授業関連の勉強(課題・予復習など)」は3年生では1.2割、4年生では1.7割となっている。これに対して「C. サークル・ボランティア活動」は3年時には約2割弱(1.8割)をさいているが、4年時には1.4割に減少する。ただし、これはサークルやボランティア活動をしていない学生も含めた平均である。就職活動には1割以下の時間(3年時0.6割、4年時0.5割)しか使っていないが、4月からの予定(Q26)を「就職」とした学生に限ると、3年時1.1割、4年時0.9割となる(グラフ省略)。

「他学部聴講」の経験者は約6割、「視野を広げる」ための聴講が約5割

Q17 他学部聴講についてお聞きします。

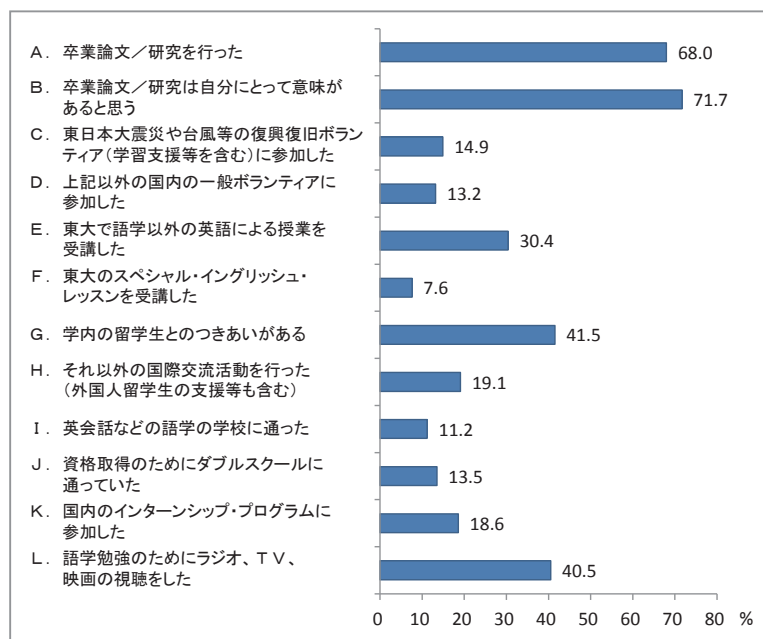


左図のように、「A. 他学部聴講をしたことがある」学生は約6割(57.9%)、「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」学生は、約3分の2(64.6%)となっている。「C. 学部横断型授業を履修したことがある」と「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」は約4分の1(前者25.7%、後者25.6%)となっている。

「他学部・他学科聴講」の意図は、右図のように「単位を取得するため」が53.8%と最も多くなっているが、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるため」も53.5%と半数を超えている。

「卒業論文の意味を感じる」学生：約4分の3 「東日本大震災ボランティア」は約1割半

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

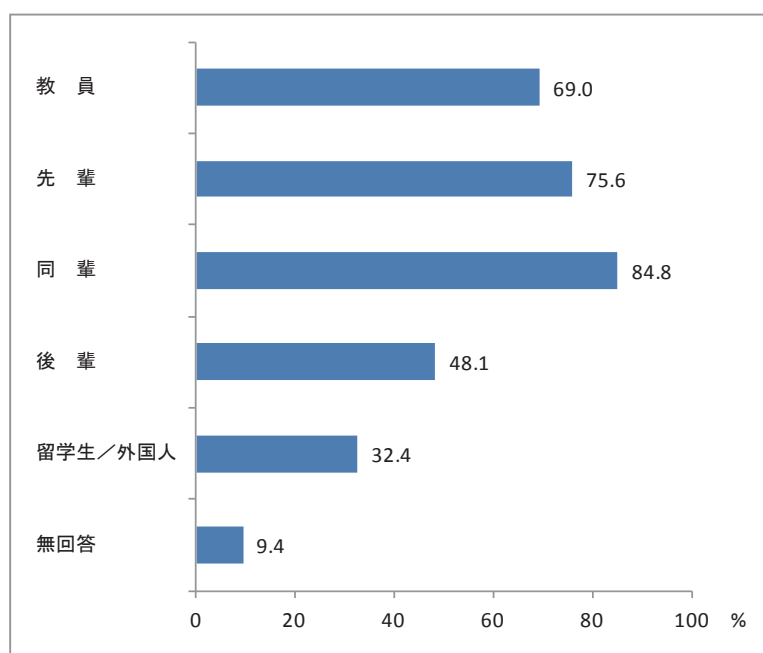


在学時の学習機会・経験として、高く評価されているのは「B. 卒業論文／研究は自分にとって意味があると思う」(71.7%)と「A. 卒業論文／研究を行った」(68.0%)で7割前後になっている。また、「G. 学内の留学生とのつきあいがある」は41.5%、「L. 語学勉強のためにラジオ、TV、映画の視聴をした」は40.5%、「E. 東大で語学以外の英語による授業を受講した」は30.4%、「H. それ以外の国際交流活動を行った(外国人留学生等の支援等も含む)」は19.1%となっている。「K. 国内のインターンシップ・プログラムに参加した」は18.6%、「C. 東日本大震災や台風等の復興復旧

ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」は14.9%となっている。また、「D. 上記以外の国内の一般ボランティアに参加した」も13.2%となっている。

「教員との学問的交流」は、約7割 「同輩」約8割半、「先輩」約4分の3、「後輩」約5割

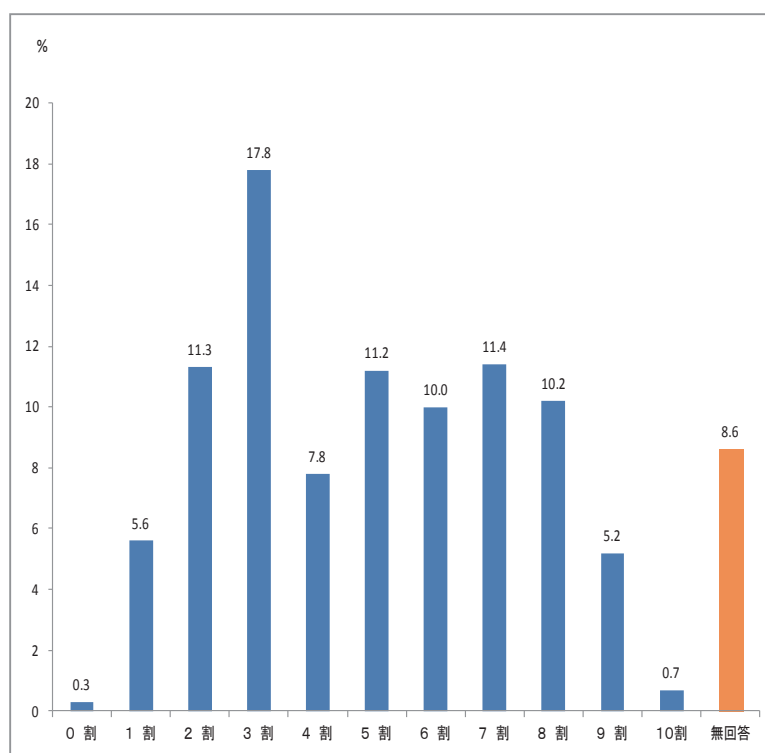
Q19 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。



最も学問的な交流があったのは、「同輩」で8割5分(84.8%)、次いで「先輩」が約4分の3(75.6%)、「教員」が約7割(69.0%)となっており、「後輩」は半数以下(48.1%)、「留学生／外国人」は3分の1以下(32.4%)にとどまっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで7割と5割

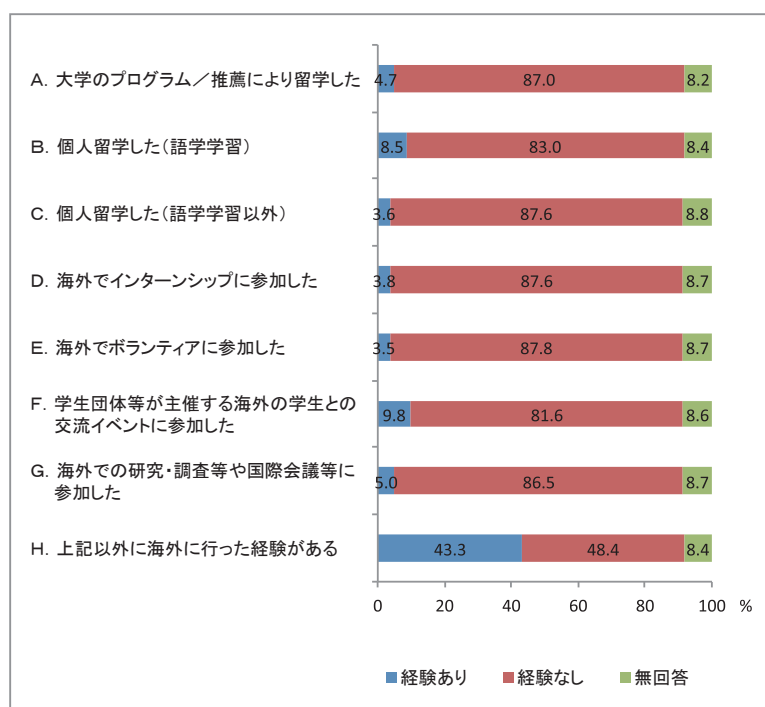
Q20 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください。「優上」や「秀」などの優以上を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が17.8%と最も多く、次いで「7割」が11.4%、「2割」が11.3%、「5割」が11.2%となっており、正規分布ではなく、右に歪んだ分布になっている。「6割」と「8割」もそれぞれ10.0%と10.2%とやや高い割合を占め、平均では、4.8割となっている。

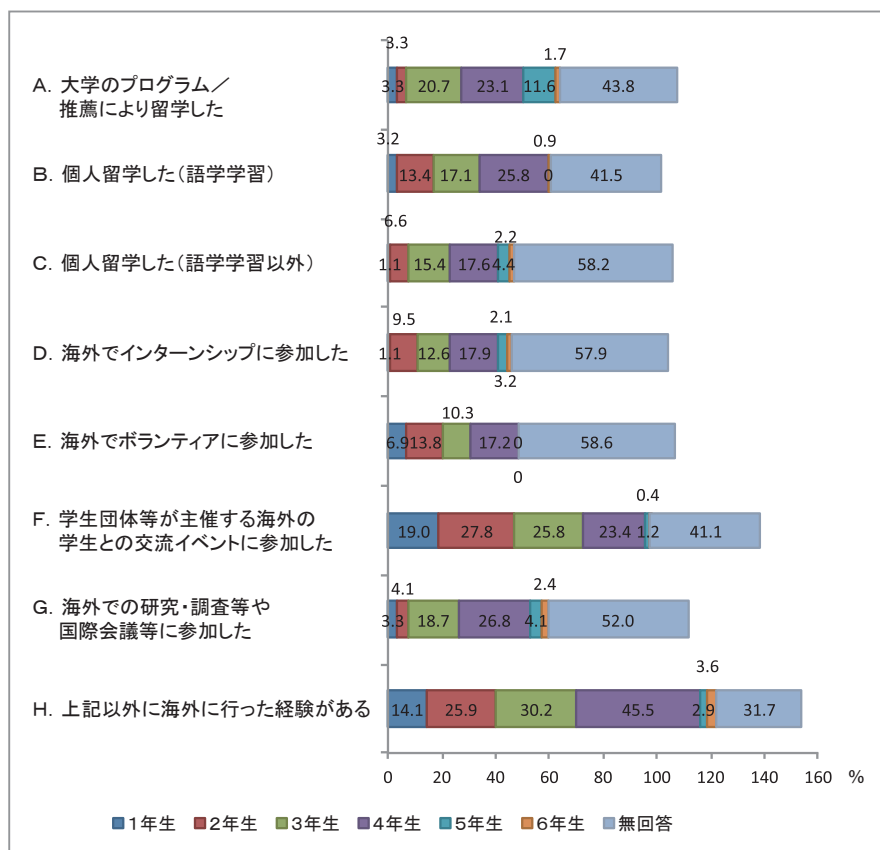
「国際交流経験」では、「大学のプログラム／推薦により留学」は4.7% 「個人留学（語学学習）」が8.5%

Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」学生は4.7%、「B. 個人留学した(語学学習)」は8.5%、「C. 個人留学した(語学学習以外)」は3.6%、「D. 海外でのインターンシップに参加した」は3.8%、「E. 海外でボランティアに参加した」は3.5%となっている。「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、比較的高く9.8%となっている。「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は5.0%、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は43.3%と4割以上になっている。

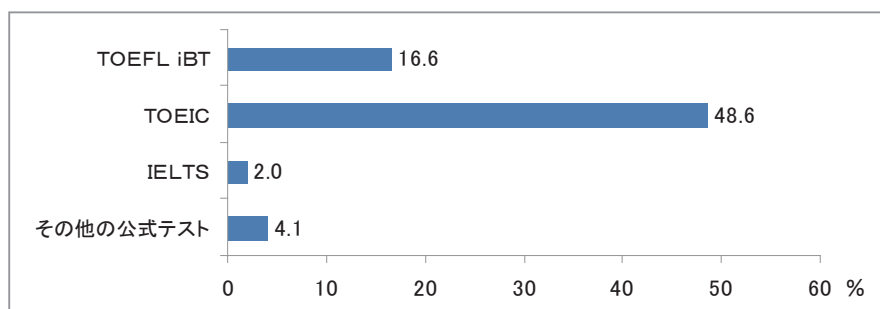
「国際交流経験」の時期は、1年時は少なく、学年が上がるにつれて高まる



左の図は、今年度より新たに加わった質問で、前問(Q21)の国際交流経験について、経験者に何年時に経験をしたかをたずねたものである。複数回答のため、合計は100%を超えている。「無回答」が多いため、注意が必要である。活動内容によって、割合が異なっているが、1年時は少なく、学年が上がるに従って割合が高くなる傾向が見られる。ただし、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」については、あまり学年による差はない。

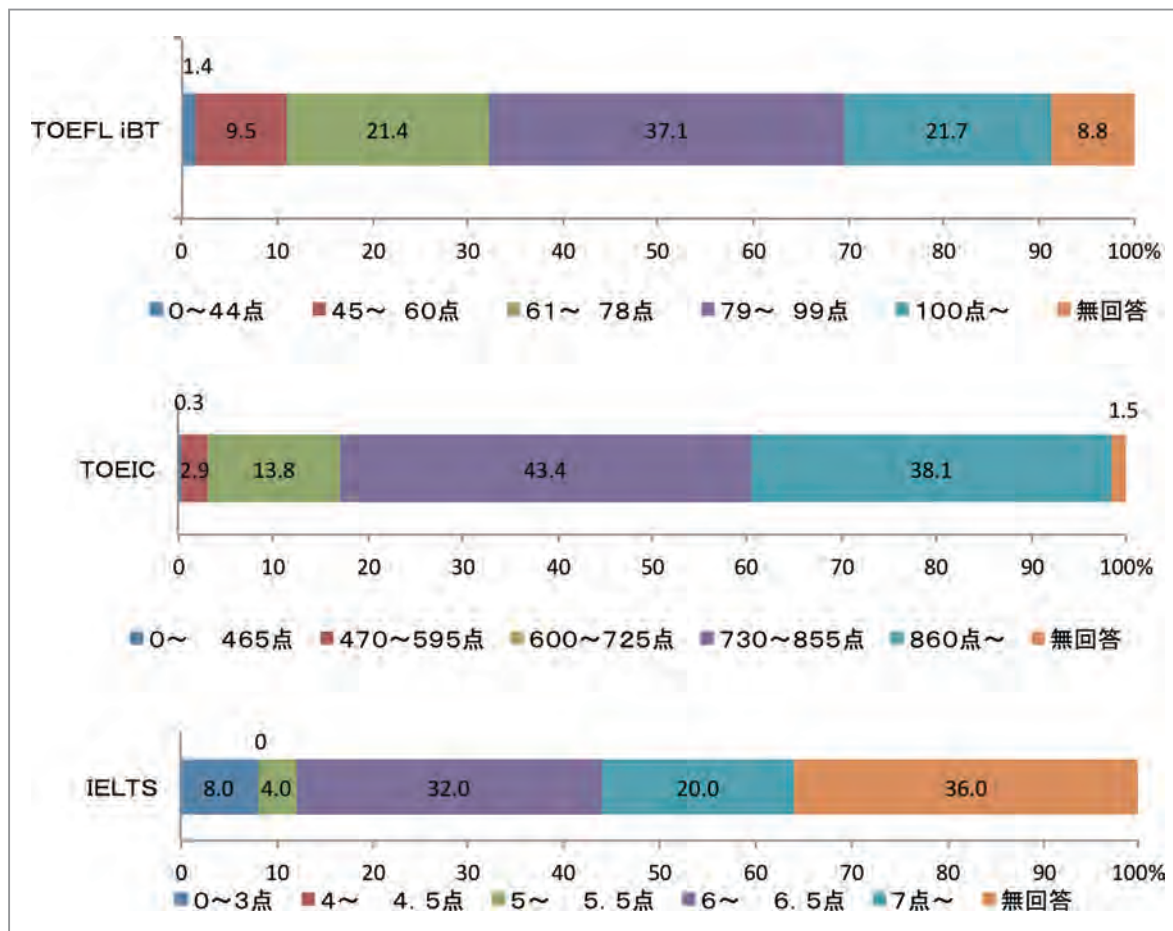
「TOEFL iBT 受験者」は約6分の1 「TOEIC 受験者」は半数近い

Q22 あなたは、在学中にTOEFLやTOEIC等の公式テストを受験したことがありますか。



TOEFL iBT の 受 験 者 は 16.6 %、TOEIC 受 験 者 は 48.6%、IELTS 受験者は2.0%、その他の試験は4.1%となっている。この設問は選択肢を変更したため、昨年度までと比較はできない。TOEIC のみ昨年度と同じため比較可能であるが、昨年度は51.2%で、昨年度よりやや減少している。

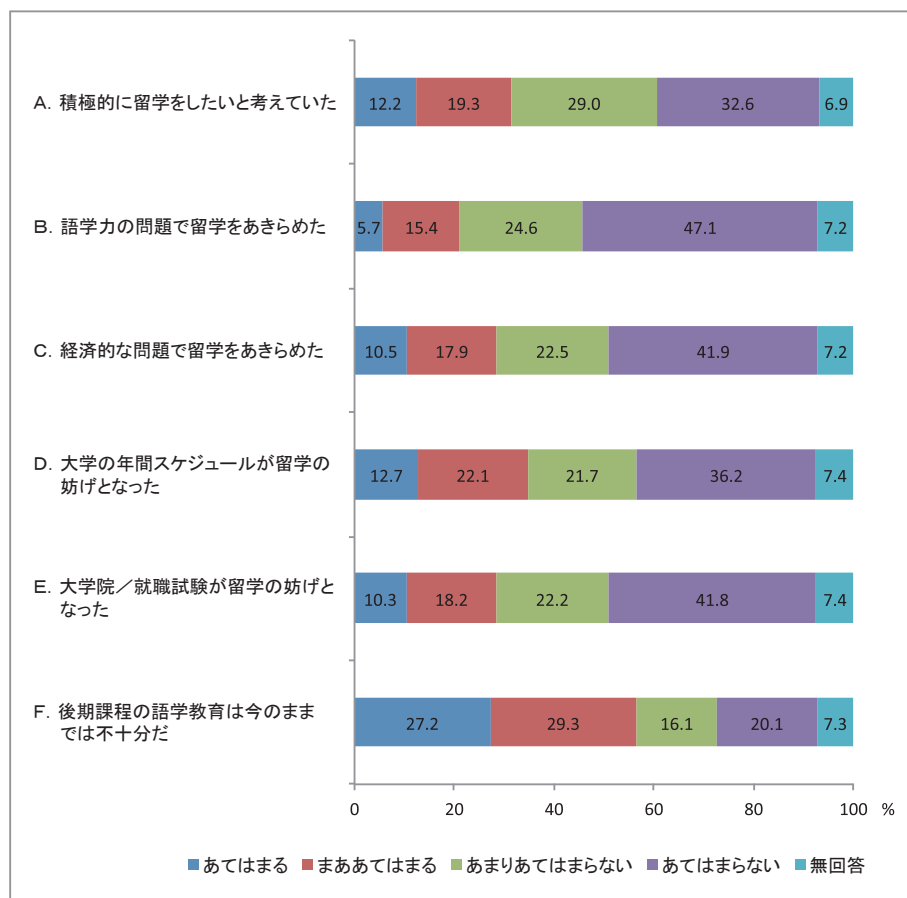
TOEFL iBT は「79 から 99 点」、TOEIC は、「730 から 855 点」、IELTS は「6 から 6.5 点」が最も多くなっている



それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、上図のように、TOEFL iBT は「79 から 99 点」、TOEIC は、「730 から 855 点」、IELTS は「6 から 6.5 点」が最も多くなっている。この設問も昨年度と選択肢を変更したため、比較はできない。

「留学の障害」は「大学の年間スケジュール」、「大学院／就職試験」、「経済的問題」、「語学力」の順

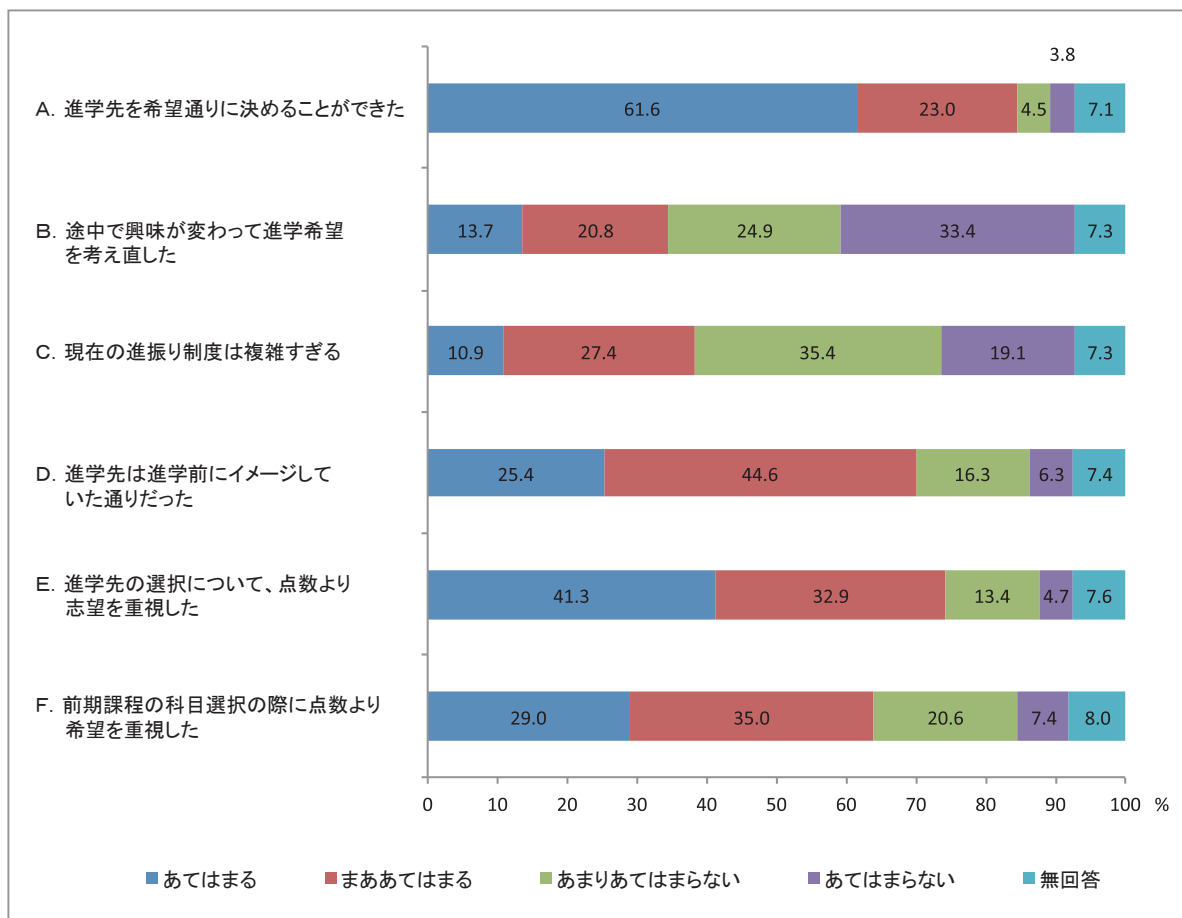
Q23 留学や語学学習についてお聞きします。



「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」学生は、約2割（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて21.1%、以下同じ）であるが、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」学生は、約3割（28.4%）である。また「D. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」（34.8%）と「E. 大学院／就職試験が留学の妨げとなった」（28.5%）で、これらは昨年度とほぼ同じ傾向である。これに対して、「F. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする学生は、昨年度は3分の2近く（64.4%）にのぼっていたが、今年度は56.5%とやや減少している。

「進学先」は「希望通り」が8割以上、「進学希望を考え直した」：約3分の1

Q24 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

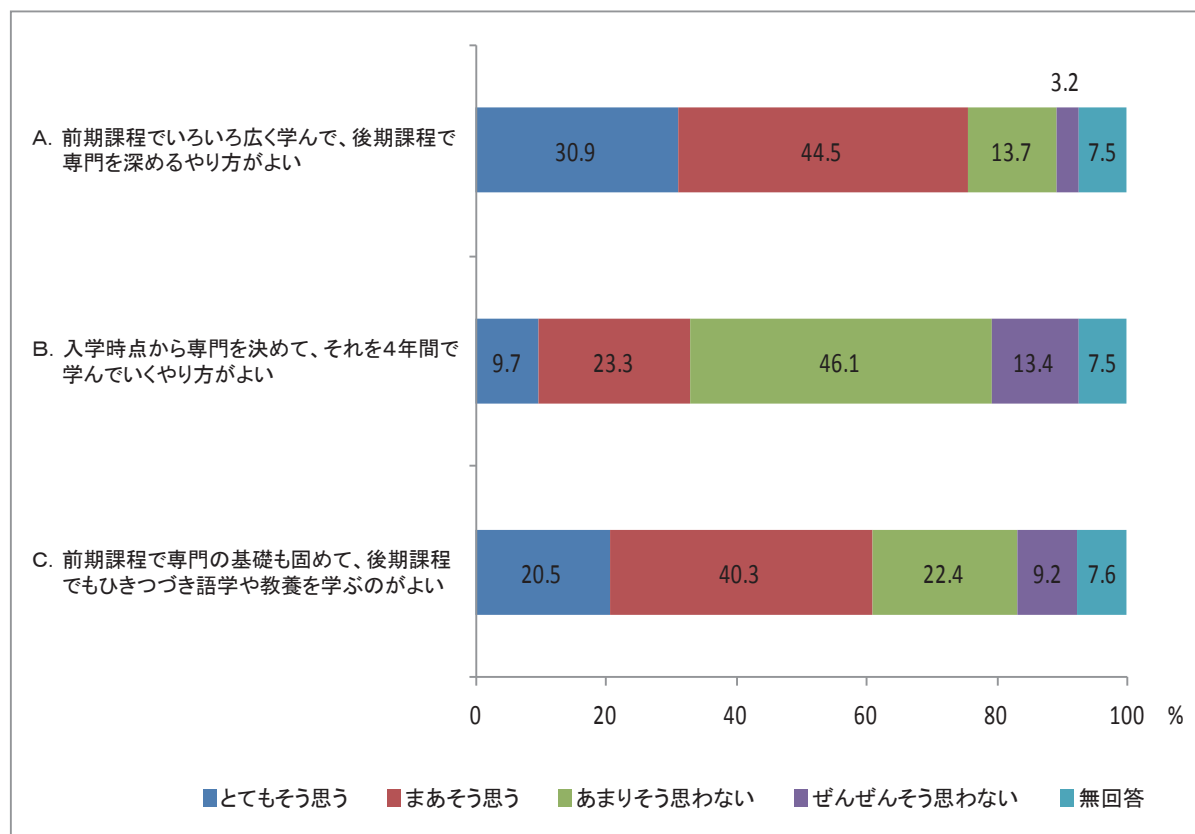


「A. 進学先を希望通りに決めることができた」学生は、84.6%（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて、以下同じ）8割を超えている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」学生も3分の1以上（34.5%）となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」学生は、7割（70.0%）となっている。「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」は約4割（38.3%）の者が複雑すぎるとしている。「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」は、約4分の3（74.2%）となっている。「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」は約3分の2（64.0%）である。

「G. 全科類枠で進学した」で進学した者の割合は、7.1%となっている（グラフ省略）。

「専門と教養の学習の仕方」については、「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」という現行方式を評価する学生が約4分の3だが、「後期課程でも語学や教養を学ぶのがよい」という学生も約6割

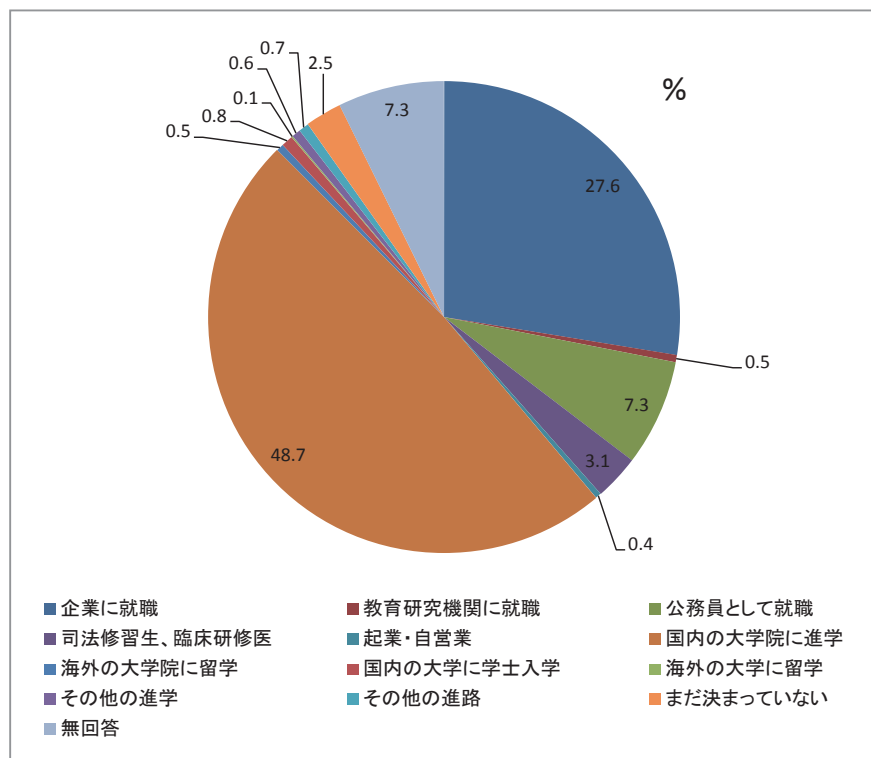
Q25 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。



「専門と教養の学習の仕方について」では、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する学生が、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせて75.4%と約4分の3となっている。これに対して、逆に、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する学生は約3分の1（33.0%）となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする学生も60.8%と約6割となっている。

「卒業後の予定」:「進学」が半数以上、「就職」が約4割

Q26 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。



働く

1. 企業に就職 (27.6%)
2. 教育研究機関に就職 (0.5%)
3. 公務員として就職 (7.3%)
4. 司法修習生、臨床研修医 (3.1%)
5. 起業・自営業 (0.4%)

学ぶ

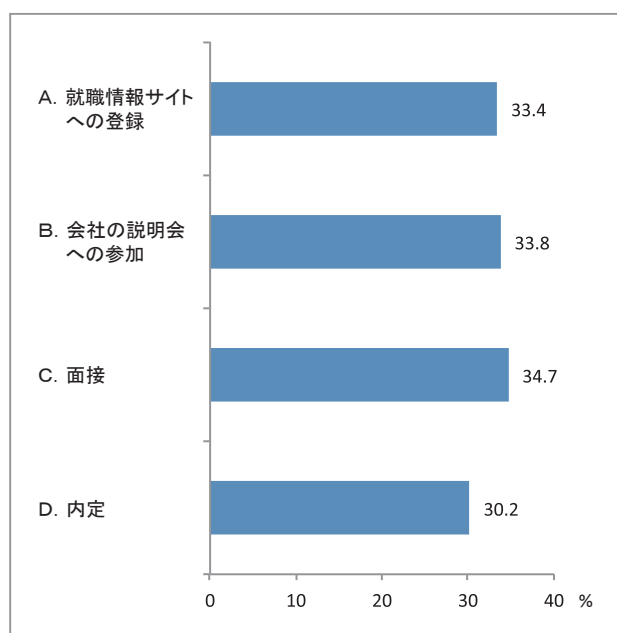
6. 国内の大学院に進学 (48.7%)
7. 海外の大学院に留学 (0.5%)
8. 国内の大学に学士入学 (0.8%)
9. 海外の大学に留学 (0.1%)
10. その他の進学 (0.6%)
11. その他の進路 (0.7%)

未定

12. まだ決まっていない (2.5%)

4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が48.7%と最も多く、「海外の大学院に留学」と合わせて、大学院進学予定は、約5割(49.2%)となっている。これに対して、「企業に就職」は約3割(27.6%)で、「教育研究機関に就職」0.5%、「公務員として就職」7.3%、「司法修習生、臨床研修医」3.1%、「起業・自営業」0.4%と合わせて就職予定は、約4割(38.9%)となっている。進路未定は2.5%ときわめて少ない。

Q27 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては「C. 面接」が34.7%と最も高い割合を示しており、以下、「B. 会社の説明会への参加」33.8%と「A. 就職情報サイトへの登録」33.4%がほぼ等しくなっている。また、「D. 内定」に関しては、30.2%が「内定」を受けている。

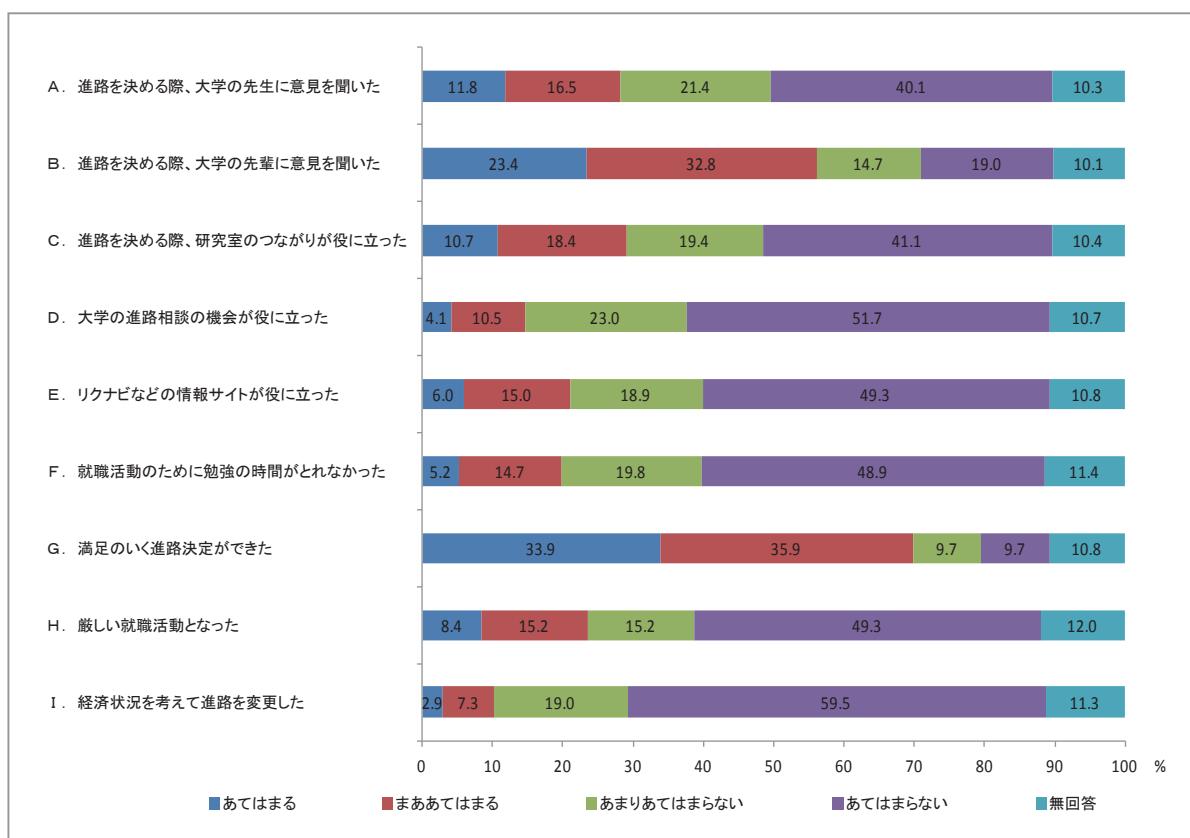
「民間企業への就職活動の時期」は3年生後期に集中

民間企業への就職活動の時期については、下表のように、3年生後期に集中しており、次いで3年生前期となっている。ただし、内定は4年生前期が69.1%と最も高い割合を占めている。

合 計	1年生	2年生	3年生 前期 (4-9月)	3年生 後期 (10-翌3月)	4年生 前期 (4-9月)	4年生 後期 (10-翌3月)	5年生 前期 (4-9月)	5年生 後期 (10-翌3月)	6年生 前期 (4-9月)	6年生 後期 (10-翌3月)	年or月 不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	0.1	0.4	26.3	62.1	1.9	4.0	0.4	1.9	-	-	0.7	2.3
B. 会社の説明会への参加	-	0.4	12.1	72.7	3.0	5.2	-	1.9	0.4	0.1	1.6	2.7
C. 面接	0.1	-	10.3	42.0	33.4	7.2	0.5	0.7	1.7	0.2	1.3	2.6
D. 内定時期	-	-	4.5	13.0	69.1	5.8	3.0	-	1.7	1.4	0.1	1.3

「進路決定」：「大学の先輩の意見」が半数以上 7割の学生が「満足のいく進路決定ができた」

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「B. 進路を決める際、大学の先輩に意見を聞いた」（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて56.2%、以下同じ）と半数を超えている。「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」（28.3%）と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」（29.1%）は約3割である。「G. 満足のいく進路決定ができた」（69.8%）のは7割となっている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」（19.9%）、「H. 厳しい就職活動となった」（23.6%）は、4月からの予定（Q26）を「働く」とした者に限ると、どちらも46.8%と半数近くなる（グラフは省略）。

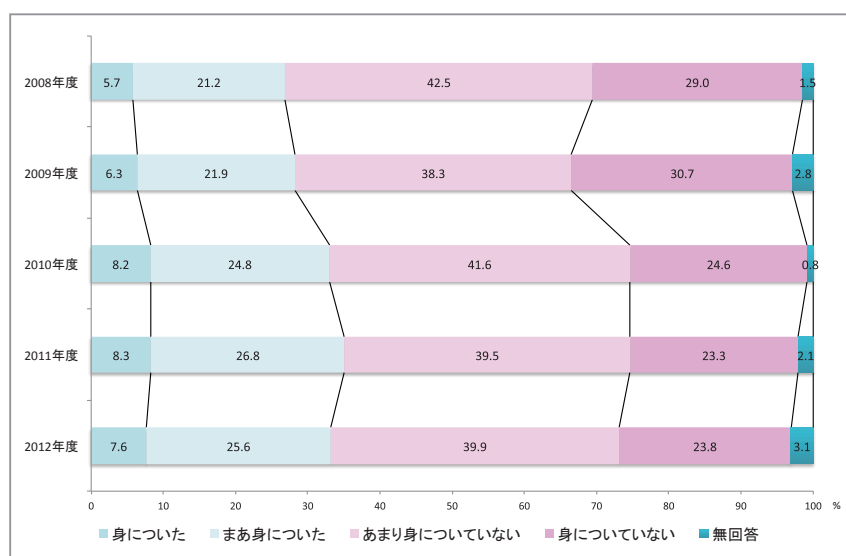
5年の間の変化が見られる項目

達成度調査は2008年度（2009年3月実施）の第1回から、2012年度（2013年3月実施）で、5回を数える。第1回の回収率は39.7%であったが、年度ごとに回収率は増加し、第5回には81.7%となっている。

この5回の調査を時系列的に見ると、多くの項目で大きな変化はみられない。もともと、学生の身につけた能力の自己評価や満足度、意識などは比較的变化しにくいという特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、5年間の間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、5年間の変化をみることにする。

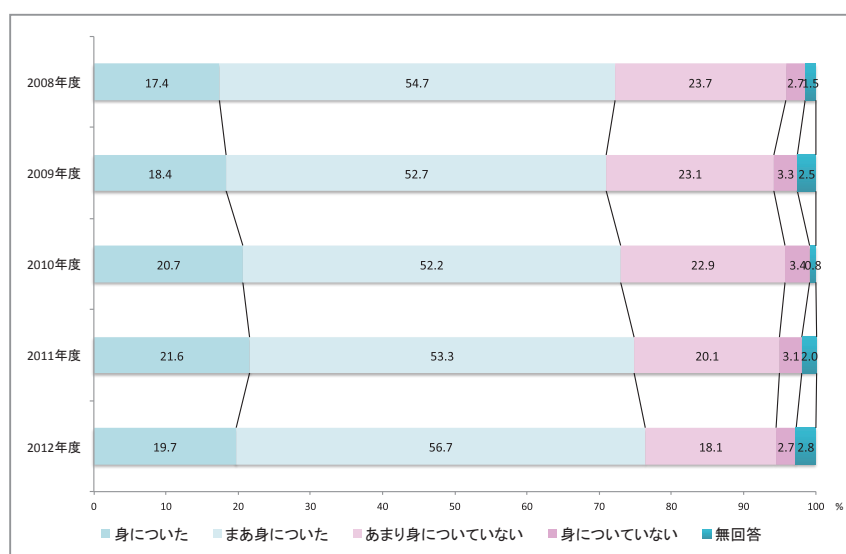
Q10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

Q10G. 外国語でコミュニケーション能力



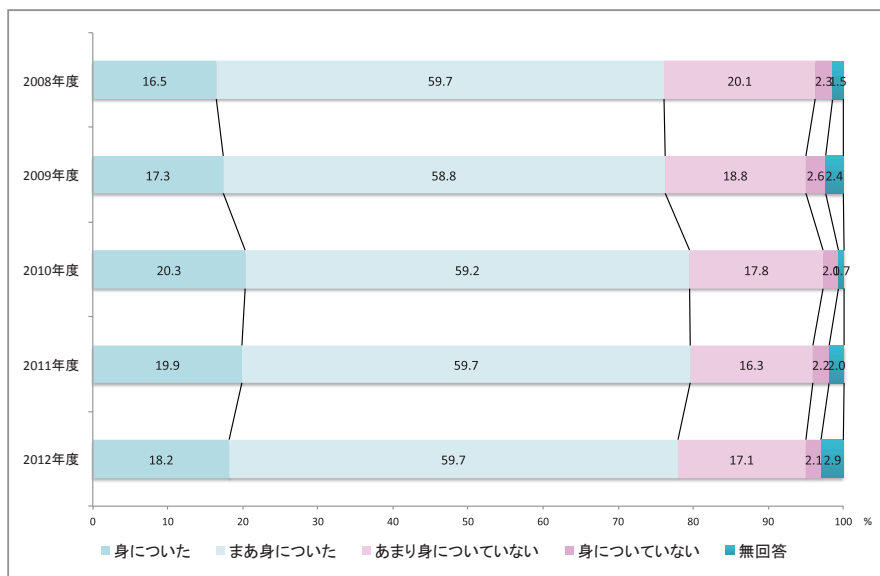
身につけた能力の自己評価で、この5年間に最も変化しているのは、「Q10G. 外国語でコミュニケーション能力」で、左図のように、2008年度には「身についた」5.7%、「まあ身についた」21.2%と合わせて26.9%であったが、年度ごとに増加し2011年度には「身についた」8.3%、「まあ身についた」26.8%と合わせて35.1%となった。しかし、2012年度には、「身についた」7.6%、「まあ身についた」25.6%と合わせて33.2%とやや減少している。

Q10C. 論理的な文章をまとめる能力



同じように、「Q10C. 論理的な文章をまとめる能力」も、左図のように、2008年度には「身についた」17.4%、「まあ身についた」54.7%と合わせて72.1%であったが、年度ごとに増加し2011年度には「身についた」21.6%、「まあ身についた」53.3%と合わせて74.9%となった。しかし、2012年度には、「身についた」19.7%と減少している。しかし、「まあ身についた」56.7%と合わせると76.4%とやや増加している。

Q10B. 問題を設定して、体系的に分析する能力

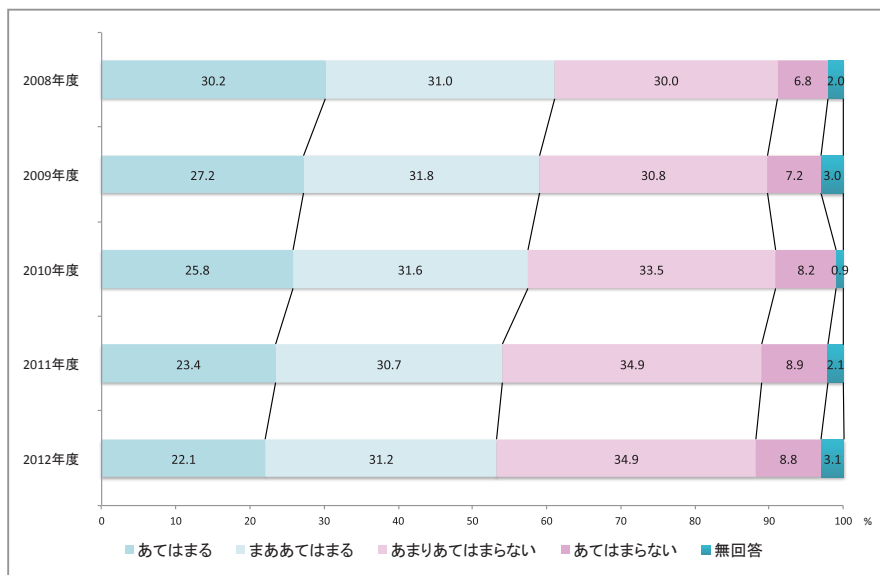


「Q 10 B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」では、左図のように、2008 年度には「身についた」16.5%、「まあ身についた」59.7%と合わせて76.2%であったが、年度ごとに増加し2010 年度には「身についた」20.3%、「まあ身についた」59.2%と合わせて79.5%となった。しかし、2011 年度には、「身についた」19.9%、「まあ身についた」59.7%と合わせて79.6%

とやや減少している。さらに、2012 年度には「身についた」18.2%、「まあ身についた」59.7%と合わせて77.9%とわずかなが減少傾向にある。

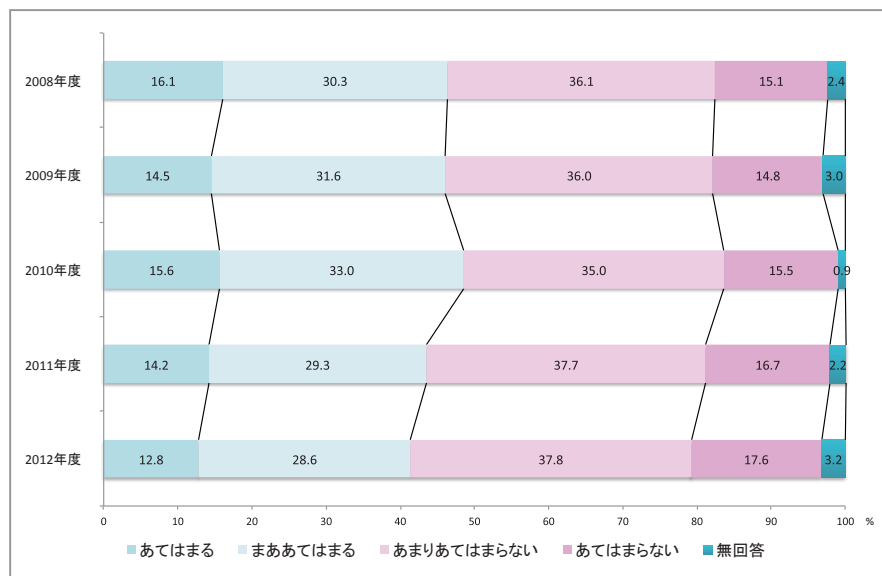
Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

Q13 I. よく自分の専門以外の本を読んだ



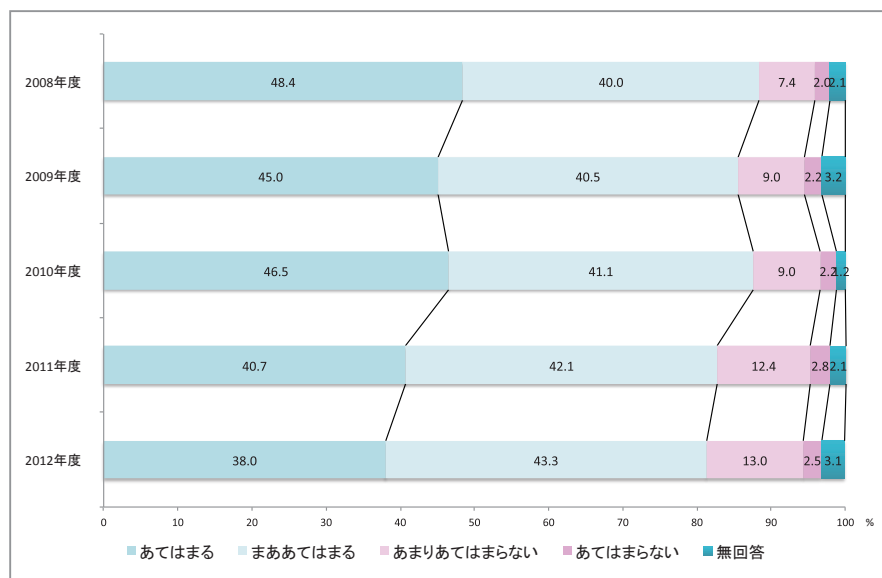
大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。左図のように「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」者の比率は2008 年度には「あてはまる」30.2%、「まああてはまる」31.0%で合わせて61.2%であったが年々減少し、2012 年度には「あてはまる」22.1%、「まああてはまる」31.2%で、合わせて53.3%と、5 年間で約8%低下している。

Q13 J. 社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ



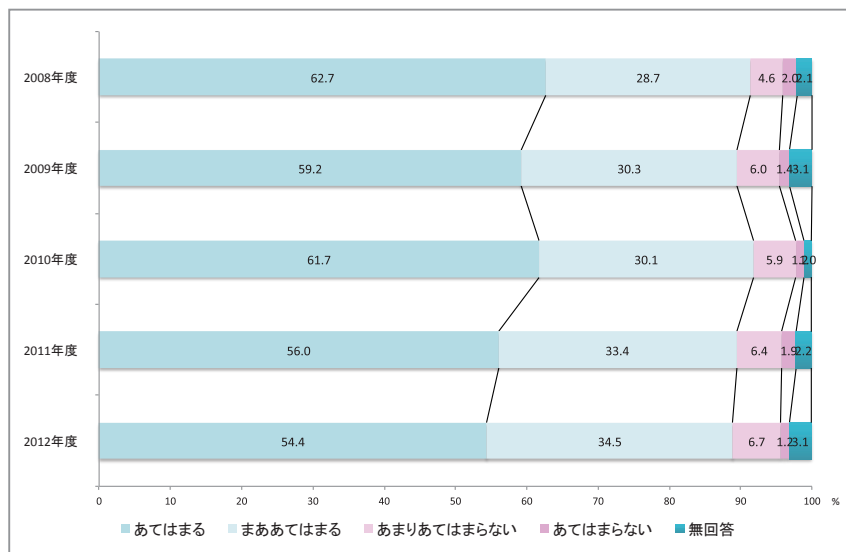
同じように、「J. 社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ」も、左図のように2008年度には「あてはまる」16.1%、「まああてはまる」30.3%で合わせて46.4%であったが、若干の増減はあるものの、年々減少し、2012年度には「あてはまる」12.8%、「まああてはまる」28.6%で、合わせて41.4%と、5年間で5%低下している。

Q13 G. 議論したり考えたりする友達を得られた



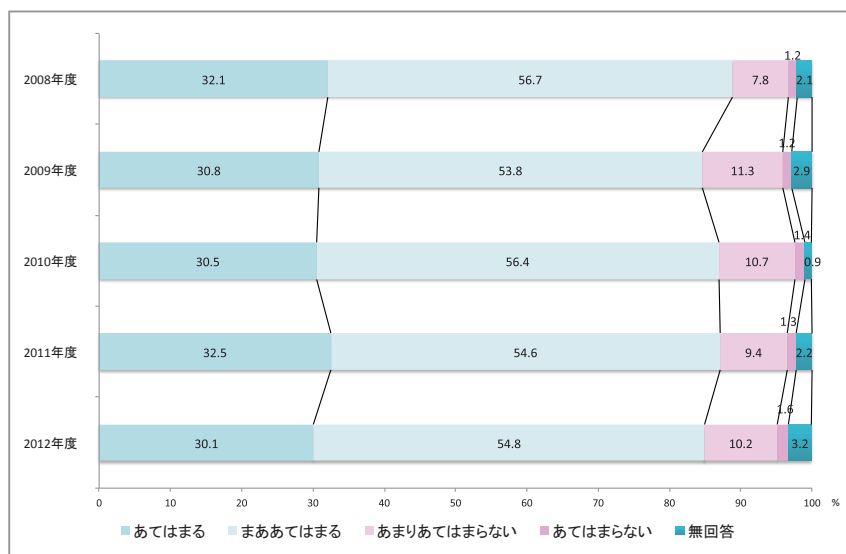
同じように、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」者の比率は左図のように、2008年度には「あてはまる」48.4%、「まああてはまる」40.0%で合わせて88.4%であったが年度ごとに増減はあるものの年々減少傾向にあり、2012年度には「あてはまる」38.0%、「まああてはまる」43.3%で、合わせて81.3%と、5年間で約7%低下している。

Q13H. 優れた友人に感心したり感化されたりした



「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」者の比率もやや低下している。左図のように、2008年度には「あてはまる」62.7%、「まああてはまる」28.7%で合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2012年度には「あてはまる」54.4%、「まああてはまる」34.5%で、合わせて88.9%と、5年間で約2.5%低下している。さらに、「あてはまる」者のみの比率では、62.7%から54.4%と8%以上の減少となっている。

Q13E. 自分なりのものの考え方を得られた



同じように、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」者の比率もやや低下している。左図のように、2008年度には「あてはまる」32.1%、「まああてはまる」56.7%で合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、年々やや減少傾向にあり、2012年度には「あてはまる」30.1%、「まああてはまる」54.8%と減少し、合わせて84.9%と、5年間で約4%も低下している。こうした長期的な減少傾向が、今後も継続していくのか、今年度以降の結果を見ていく必要がある。



THE UNIVERSITY OF TOKYO